

# 源氏物語に見える「おはします」「おはす」

## についての一考察

——王室と外戚との関わりから——

久保重

### (一)

(1) 宮、例ならずなやましげにおはすとて、宮たちも皆参り給へり。上達部など多く乗りつどひて騒がしけれど、ことなる事もおはしません。かの内記は政官なれば、遅れてぞ参れる。この御文も奉るを、宮、台盤所におはしまして、戸口に召し寄せ取り給ふを（中略）大臣も立ちて外さまにおはすれば……（浮舟——引用本文は角川文庫「源氏物語」に拠る。以下同じ。）

右の本文（明融筆本）の一行目の「おはすとて」（1）は河内本系・別本系諸本は「おはしますとて」であるが、青表紙本系諸本では「おはすとて」が優勢である（大成校異篇に拠る。以下同じ）。すなわち次の通りである。

おはすとて——明融本・平瀬本・肖柏本  
 おはしますとて——伝二条為明筆本

おはしますとて——伝二条為明筆本  
 おはしますとて——伝二条為明筆本  
 (1) の場合、主語が明石中宮であるから、最高敬語「おはします」の方が妥当だと考えられ、その方が後統の匂宮に用いられた「おはします」(3) との釣合いの上からも無難の様に見えるが、本文は「おはす」が優勢なのを無視することは困難である。そこで、中宮に「おはす」、その皇子匂宮に「おはします」を、同一場面で用いることが認められる様な、理論をもとめて、この二語の使われ方を考えて見た。

### (二)

明石中宮に用いられている「おはす」の陳述主体を考える

冒頭に掲げた本文中の「宮、例ならずやましげにおはす」に山岸徳平博士は「」を施して居られる（日本文学大系「源氏物語」五）。私の調べたところでは、古注・新注・現代注釈書を通じて、これを宮達の詞または心語と見ているのは、大系の読みだけであつた。

母后に対して皇子が「おはす」を用いる例としては

久しうおはせぬは恋しきものを（賢木）—東宮が、母、藤壺中宮に對し云う詞

似る人なくもおはしけるかな（桐壺）—光源氏が、義母、藤壺女御を思ふ心語

の二例が見えるから、特殊な言葉づかいではない。

明石中宮には、物語の地の文では、冒頭の一例を除くと、毎回「おはします」が使われている。

御かぜにおはしましたしければ…（宿木）

御輕服のほどはなほかくておはしますに…（蜻蛉）

この院におはしますをば内よりも広くおもしろく住みよきものにして…（同）

同じ御帳のうちに（女一宮と）おはしまして…（手習）

また、

明石中宮腹の今上女一宮…（a）

薫の母、女三宮…（b）

冷泉院女一宮…（c）

にも、常に「おはします」がつかわれている。

(a) その世の御しつらひ改めずおはしまして…（匂兵部卿）

(b) 西の渡殿に姫宮おはしましたしけり（蜻蛉）

(c) 入道の宮は三条の宮におはします（匂兵部卿）

(d) 母宮は今はたゞ御行なひを静かにし給ひて（中略）つれづれにおはしますせば…（同）

(e) おはします寝殿ゆづりきこゆべく宣へど…（宿木）

(f) 姫宮の御けはひげにとあり難くすぐれてよその聞えもおはしますに…（匂兵部卿）

(g) 女一宮一所おはしますに…（竹河）

この様に、源氏物語のいわゆる第三部の地の文は、明石中宮・その所の女一宮・薫の母宮・冷泉院の女一宮に最高敬語「おはします」を用いているが、これら女君はみな光源氏のゆかりの人々である。この系統の後や内親王には「おはす」が当てられている。

その頃藤壺と聞こゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける（宿木）

（藤壺女御は）心ばへなさけくしくなつかしき所おはしつる御方なれば…（同）

その所の今上の女二宮は御かたちもいとをかしくおはすれば…（宿木）

黒き御ぞにやつれておはするさま…（同）

うちとけて見奉り給ふにいとをかしげにおはす。さゝやかにあてにしめやかにてこはと見ゆるところなくおはすれば…（同）

この様に、光源氏ゆかりの中宮・内親王に限って、特に「おはし

ます」が用いられるのは、この女君達と、この、地の文を物語っている古女房との間につながりがある故だと思われる。「源氏物語」に作中人物として登場する女房達は、最高敬語「おはします」を、帝・上皇・春宮のほか、自身の仕える主君と、主人筋にあたる尊貴の人々にも使っているし、また、同一作者の手になる「紫式部日記」の地の文でも、一条天皇のほかに、作者の仕えた中宮彰子・その所生の若宮（後の後一条帝）・彰子の父道長に「おはします」を用い、これ等の人には「おはす」を用いないが、他系の女御・后・齋宮には「おはす」を用いるのを、われわれは見て来た（注1）。そして、冒頭に掲げた文は、匂兵部卿の巻を

光かくれ給ひにし後、かの御かげに立ち継ぎ給ふべき人そらの御末々にありがたかりけり

と語り初めている人と同じ語り手の詞として設定せられていると、一般に考えられている。光源氏由縁の上記の女君たちに、「おはします」がつかわれるのは当然の帰結と云えよう。言葉を変えて云うと、この部分を語っている女房の視点からは、明石中宮に「おはします」（2）は適当な言葉つかいであるが、「おはす」（1）は不相当であり、不可能な言葉と云える。山岸博士の読みにしたがって、「おはす」（1）を、宮達の詞又は心語と解するか、語り手が陳述視点を、宮達のそれに移して叙述している地の文と解するべきで、二者いづれを採択するとしても、

宮、例ならずなやましげにおはす

は、明石中宮腹の親王達の視点から述べられているのである。

注1 大阪樟蔭女子大学論集第14号所収小稿「源氏物語の地の文における敬語段階の移行について」中にて述べた。

(三)

匂宮につかわれている「おはします」の性格

われわれは、上に、明石中宮、女一宮、女三宮に「おはします」が地の文につかわれ、女二宮には「おはす」がつかわれるのを見て来たが、これは語り手が、劣り腹の女二宮を貶しめて待遇したのではなく、源氏物語では内親王・親王に「おはす」をあてるのが普通なのである。

(女五宮) いと旧めきたる御けはひしはぶきがちにおはす (朝顔)

(祖母大宮) よろづの物の上手におはすれば… (少女)

(落葉宮) 箏の琴なつかしく弾きまさぐりておはするけはひも

… (若菜下)

父親王 (常陸宮) おはしける折にだに (未摘花)

(兵部卿宮) 御遊びなどもをかしうおはする宮なれば… (賢木)

(帥宮) いとよしありておはする中に… (絵合)

(式部卿宮) この御時にはましてやんごとなき御覚えにておは

する (少女)

親王たちおはしつどひたり (螢)

(螢兵部卿宮) えんがりおはする親王にて… (梅枝)

は、明石中宮腹の親王達の視点から述べられているのである。

(螢兵部卿官) えんがりおはする親王にて：(梅枝)

父宮(前坊) 母御息所のおはせまし御ための志をも(若菜上)

(八宮) その頃世に数まへられ給はぬふる宮おはしけり(橘)

姫)

冒頭に掲げた例文(1)では、匂宮に「おはしましたて」(3)が用いられている。次の場合も、亦、同様である。

(1) 賭弓の還饗のまうけ、六条の院にて、いと心ことにし給ひて、親王をもおはしませむの心つかひし給へり。その日親王達、おとな(2)おはする、みな候ひ給ふ。后腹のは、いづれともなく、気高くおはします中にも、この兵部卿の宮は、げにいとすぐれてこよなう見え給ふ。(略)宰相の中將は負け方にて、おとなくまかで給ひにけるを、(夕霧)「親王達おはします御送りには参り給ふまじくや」とおしとどめさせて、御子の右衛門の督、権中納言、右大弁など、さらぬ上達部あまた、これかれに乗り交り、いざなひ立てて、六条の院へおはす。(匂兵部卿)

例文(1)は、明石中宮所生の皇子達に、「おはします」(3)、他腹の皇子達をも含む場合には「おはす」(2)と明瞭な区別を見せている。等しく今上帝の子でありながら敬語段階に差があるのは、話し手の視点に立つた遠近法が存在するためであると考えてよかる。地の文に用いられた(3)の方は、すでに見た女一宮の場合と全く同じ条件の下に用いられているので、説明の要もないのだが、夕霧の心語と詞に、「おはします」(1)「おはします」(4)が見えるの

が、注意をひく。(1)と(4)が、ともに、主として后腹の皇子達を対象とした敬語であることは、文意から明かである。(4)は聞き手の薫と共に、親王達に敬意を払う云い方である。夕霧と薫が、光源氏血縁の親王に、格別の敬語を用いて、他系皇子とは区別した崇敬待遇の対象としていることがうかがえる。

左大将夕霧と宰相中將薫、二人は光源氏の後継者であり、后腹皇子達の外戚の伯父・叔父にあたる。外戚の権力者が、自家から后妃を出し、その所生の皇子が次代の皇位に即くことを希求し、その後と皇子の勢力増幅に熱中し、一門を挙げて尊びかしづくのは、摂関制度下の当時の宮廷貴族社会の著しい特色であった。この自家の系統の後宮の繁栄を競い合う風潮が、排他的とも云える様な、「おはします」の用法を生んだのではないかと私は考える。大臣・大将が、后・女御・皇子達に最高敬語を用いて、(三人称の場合にも)語る。それは自家出身者に限る——上に見た夕霧の詞がそれであった。次の内大臣(桐壺・帚木では頭中將)がその女、弘徽殿女御について、北の方に語る言葉もそれである。

「まかでさせ奉りて、心やすくうち休ませ奉らむ。さすがに上につと侍はせ給ひて夜昼おはしますめれば」

夫婦の間で、わが娘のことを語るのに「奉り」「奉ら」「せ給ひ」「おはします」と、敬語使用頻度が高い上に、主上並みの最高敬語まで用いている。一方、この女御が、他家で話題になる時には、しかもそれが競争者の立場にある後の実家側では、次の様な敬語待遇を受ける。

中宮かく並びなき筋にておはしまし、また弘徽殿やむごとな  
く、覚え殊にても給へば：(藤袴)

話し手は夕霧、聞き手は光源氏、場所は六条院、秋好中宮の里方である。中宮には「おはします」が用いられているのに、弘徽殿女御は「ものし給へば」で待遇されている。「おはす」より更に一段階下の敬語である。これは夕霧が、妻の姉の弘徽殿女御やその父大臣に悪意があつての所為ではない。秋好中宮の養父たる源氏に斟酌して、「おはす」より一段下げて語つたのである。その様な配慮の必要のない場合でも「おはす」以上の敬語を他系の女御に用いることはない。相手方も亦、同様である。

この様な上層貴族の、わがゆかりの后に對するかしづきが背景にあつて、この物語の語り手女房が、自家出身の后妃とその所生の皇子に最高敬語「おはします」をつかう土壤が培われたものと思われ  
る。例文(回)他腹の皇子に「おはす」がつかわれているのは、劣り腹の故ではない。他腹、他系の故であることが、これで明白である、語り手の陳述視点から、自家の主人の血縁が否かで、一方には「おはします」、他方には「おはす」と区別して用いているのである。

ここでわれわれは、語り手の女房が、さらに遡つては后妃の実家方が、何故に、自系の后や皇子のみ「おはします」を用いるのか、それはどの様な意味内容を包含して、作中の上層貴族に用いられているのかを、探つて見る必要がある。 「おはします」と「おはす」との差異は、敬意の程度の強弱という様な単純なものではない様な気がするからである。

ない様な気がするからである。

本来は「おはします」は「大御座(オオマシマス)」の転で、古くは神に用いられ、次いで天皇に用いられる様になつたもので、王位や王の權威を連想させる雰囲気をもつ語である。時代が降つて、源氏物語に見出される「おはします」は、各階層によつて、また、男女の別によつて、異つた用い方をされていて、敬意の対象の身分の上下限を、それぞれ異にするが、今は、本稿のテーマに即した範囲内で、問題を考へてゆくこととする。摂関制下の上層貴族が、自家の出身の后と、その所生の皇子皇女達に「おはします」を用いる場合、その「おはします」は、単に「おはす」よりも尊敬度の強い敬意を表すというだけでなく、何かそれ以上、包摂されている意味がありそうに思えるがそれは何なのか

「王位」と「おはします」

光源氏の詞に在位の帝に對して「おはす」を用いている例が一ヶ所見受けられる。

されど、大原野の行幸に上(冷泉帝)を見奉り給ひては、いとめでたくおはしけりと思ひ給へりき。若き人はほのかにも見奉りてえしも宮仕への筋もて離れじ、さ思ひてなむこの事はかく物せし(藤袴)

源氏が夕霧に、玉鬘を尙侍にしたことを説明する条である。文中の「いとめでたくおはしけり」は玉鬘の心を忖度して云つていのであるが、源氏は、玉鬘の尙侍任官は彼女の決意に由るもので、その直接動機は、行幸園簿を見た際冷泉帝の美貌に心惹かれたことに

「おはす」との差異は、敬意の程度の強弱という様な単純なもので

あると云うのである。

天皇に「おはす」が用いられた例は、行幸の巻の大原野行幸の個所にも見える。源氏物語の地の文中、在位の天皇に「おはす」を用いている唯一例である。

源氏の大臣の御顔さまは異ものとも見え給はぬを、思ひなしの今少しいつかしようかたじけなくめでたきなり。さはかゝる類はおはしがたかりけり。(行幸)

(大成校異篇に拠ると、上の藤袴の巻の「おはし」も、今見る行幸の巻の「おはし」も、河内本には「おはしまし」と見えるが、青表紙本系には異文を見ない)行幸の巻の「おはしがたかりけり」

は陳述視点を玉鬘に移行させて、冷泉帝の水際立った容貌に驚き感動する若い女の心の躍動を直叙した句と解せられる。「行幸」と「藤袴」とに二度繰返して用いてあるので、作者が「おはします」をわざと避けたことがわかる。玉鬘が見たものは、「天皇」でなく、「美男子」そのものだったのではなからうか。「二人の絶世の美男」そのものがまさにそこに存在した、それを玉鬘が見た。」というこだけを、作者は表現したかった。それには「天皇」を示す「おはします」は邪魔になるのだからと私は推測する。  
光源氏の詞に見られる「おはします」の対象は、三人称主語は用いられたもののみを挙げると、次の10例である。

(例)		文	
宮の御世だに事なくおはしますまば	いときなき御よはひにおはしますを	東 宮(冷泉)	詞
まだいといはけなくおはしますめるを	今すこしおとなびおはしますを見奉りて	冷泉帝	心語
御位におはしましし世には	今かく政をさりて静かにおはします頃ほひ	朱雀院	詞
東宮かくておはしませば	雄々しくすぐよかなる方の御才などこそ心もとなくおは	東 宮(今上)	心語
しますと世の人思ひためれ	おはしますまむ程はなほ心をさめて	朱雀院	心語
今のはどかにおはしますに		女三宮	詞
		冷泉院	心語
		夕霧	詞
		朱雀院	心語
		須磨	詞
		滯標	心語
		若菜上	詞
		若菜下	心語
		鈴虫	心語

光源氏が「おはします」を用いるのは、東宮、天皇、上皇のみである。云い換えると、彼の用いる「おはします」は、王位、または、王の権威と密接な關係を有つのである。作者が、上に見た、玉鬘の冷泉帝をはじめ見た時の感銘を表現する際、「おはします」の使用を避ける方法で、排除されたものは、「王」という屬性であった様である。本稿の冒頭に見た明石中宮腹の皇子達が、母后に、「おはします」を用いない例は、光源氏の用例と同一の、正統的な用語

法であると言えよう。

上層貴族婦人の「おはします」の対象

次に、上達部階層以上の家庭婦人の三人称主語に用いた「おはします」について調べて見よう。彼女達は、同じ階層の男性が「おはします」を用いる場合にも、多くは「おはす」をつかうので、用例は少く次の教例に過ぎない。

(例)	文	(話し手)	(敬意の対象)	(詞又は心語)	(聞き手)	(巻名)
1	かくておはしますもいましくかたじけなくなむ	更衣母	若宮	詞	靱負命婦	桐壺
2	女におはしますむだにあなたにて見奉り給はむこそよく侍らめ	明石御方	若宮	詞	光源氏	若菜上
3	みぐしなどおろい給うてけるさる方にておはしますましかばかやうに通ひ参る人もおのづから繁からまし	八宮の姫君	故八宮	詞		椎本

1は、桐壺の更衣の母（故按察大納言北の方）が、若宮（光源氏）について、桐壺帝から遣わされた靱負命婦に語る詞である。若宮に「おはします」が用いられているので、孫と祖母という關係は詞の表面から消えて、公的な、皇子と臣下という意識だけが強く出ている。

2は、明石東宮女御が初めて生んだ若宮を、紫上が自室に伴つていつくしむのを、光源氏が「……かろしくなくだかく渡し奉り給ふ。こなた（寝殿）に渡りてこそ見奉り給はぬ」と苦情を云

つたのに対して、女御に代つて、女御の実母明石の御方の応えた詞の一節である。明石御方は、「若宮の祖母」の地位は紫上に譲つて、女御のお世話役の格で付き添っているが、この「おはします」が女房の用語法のそれでないことは、彼女の「おはす」の用法を見ると明かである。彼女が、明石女御に用いる待遇語は「おはす」である。

かくためらひかたくおはす、程つくろひ給ひてこそ（若菜上）

給ふ。こなた（寢殿）に渡りてこそ見奉り給はぬ」と苦情を云

上

女三宮について蔭で批評した詞も「おはす」である。

（紫上と）同じ筋にはおはすれど今ひとときは心苦しく（同）

これで明石御方が、若宮に用いた「おはします」は、一般に、后妃の実家の家族が、その所生皇子に用いるものと同種類であることは明かである。すなわち、明石女御所生の若宮が「皇子」であることを強く打ち出した言葉つかいと見てよい。

3は、八宮の死後間のない歳末、宇治山の阿闍梨の使の法師や童等の帰行く姿を見送って、大君と中君が語りあう詞である。この姫君達が、父宮に「おはします」をつかう唯一の例である。（念のために調べたが、諸本悉く同じであった。）姫君たちは他の姫君達と同様に、父母には「おはす」を毎回つかっている。この場合にのみ「おはします」が用いられるのは、故父宮が「親王」であることを姫君達が強く意識していることの表現なのであろうと私は考える。姫君達が言う通り、父宮亡き今後は、いよいよ社会から忘れ去られてしまいうに違いない身の上の二人なのである。中央の宮廷から遠ざかっていたとはいえ、父は親王であったから、極く限られた範囲内ながら「通い参る」少数の人達が居た。歳晚、阿闍梨のもう今年限りの御機嫌伺いの一行が帰り去るのを見えなくなるまで二人は見送りながら、支えも抵抗力もない今の孤独の位置から、亡父在世中にはあった頼り所を追懐する。その焦点は、「父親王」である。即ち、姫君が「おはしますましかば」と反実仮想の形で云う「おはします」は、「天子の御子」という父宮の身分の表現と解さ

れるのである。

以上見て来た、上層貴族の女君達によって用いられている「おはします」に共通点を求めると、（一）敬意の対象が皇子に限られていること、（二）話し手が、対象を公的地位において崇敬する、の二点に要約できる。

王室外戚の家庭と「おはします」

政權貴族が、自家出身の後妃とその所生皇子に、「おはします」を用いるのは、源氏物語に見る所では、もともとは恭謙な、私的つながりを言葉の表から消去して、対象の皇室所属者という身分を強く意識しこれを尊び崇めるための特殊的な表敬用語であったのだろう。また、その故に他系出身の後妃や皇子には使用しなかつたものと思われる。

しかしながら語には、本来の意味と、日常の言語生活の中から生じる位相の面とがあるのを見落すわけにはゆかない。源氏物語に見える、后妃の実家側の使用する如上の「おはします」の中には、皇室との密着に基く話し手の特権意識の表現として受けとめられるものが見える。例文(向)の夕霧の使用例もその一つだろう。

この物語を語る女房が、自家の主人筋の後妃や、その所生の親王・内親王に用いる「おはします」は、多分に、誇示的で、他系に対する競争意識や特権意識が強く打ち出されている。これは作者が、女房という人種をその様な性質を持ったものとして扱っている所にも由来するものであろう。語り手の女房が、主人筋の後妃皇子に用いる「おはします」は、作中で王室外戚の貴族の男女が、それに用



いる「おはします」と根源的には同質の、摂関制時代独得の「うる見」の風潮を反映するものであることは論を俟たない。

夕霧は例(イ)では、右大臣、例(ロ)では近衛大将、鉦々たる朝廷の重鎮で、亡き光源氏の直系の後継者、六条院の当主であるが、「おはします」の対象とされないのは、彼が語り手の主人でも、皇子でもないからである。このことは、半面で、本来は、帝・上皇・春宮に限って使用されたこの最高敬語を、王位継承への憧憬から、派生的に、上層貴族が、自家の後見る后妃・親王・内親王におし拡げて行った成り立ちを思い起させる。女房達も勿論この線上で、主家の尊崇する対象に、この濃厚な敬語を使うのである。例文(イ)における語り手の女房の視点から明石中宮腹の親王達につかう「おはします」は、こういう性格のものであった。上に触れた光源氏の「おはします」使用法とは、質の異なるものと云える。

#### 結語 (四)

源氏物語の中で、それぞれの話し手の視点から、それぞれの対象に「おはします」が使われる時、この語の持つ「王」を連想させる雰囲気が出ている。立て行くさまは、非常に美しく、また興味深い。源氏物語がその独得の美的体系を構築してゆく過程で、「おはします」の意味のこの新しい拡充は、様様に美的効果を挙げて、たしかな定着を示すが、冒頭の例文の、母后に「おはす」という親王達と、その親王達に最高敬語「おはします」を用いる地の文との、対比的用

法にも、それが認められる。同一場面で陳述視点を異にして、この二語が効果的に使用されているために、中宮退下中の六条院が、この短文中に生彩あるものとして、描き出されていると思う。

(本学教授)